報告12　デンマーク

クロンボーフスの安心

クロンボーフス（Kronborghus）知的障害者住宅を訪ねた。昨日訪問した「余暇活動センター」の敷地にあった古びた入所施設（大きな精神病院の跡地）は、2004 年町中に新築され、21 人（７人×３ユニット）が住む。木をふんだんに使ったモダン住宅だ。

北欧ではこのような場を「施設」とは呼ばない。それぞれの「家」にしようというとりくみを「脱施設化」とした。手厚いケアのある充実した集合住宅が町中にあり、重い知的障害のある彼や彼女らは安心してゆったり暮らしている。

「ベットルームとリビング＋台所とトイレ・シャワー、一人あたりの共有部分含め 65 平米」。デンマークの建築基準法はそう定めているそうだ。生きていくために必要な居住空間の保障は国の責任だ。

＊

ベッチーナ・ソーレンセンは魅力的な副施設長だ。クロンボーフスを熱心に案内してくれていると、なかまのみんなは、嬉しそうにつぎつぎとやってくる。彼女は、入所施設時代の最後の頃となる 2000 年からここで働いている。マッサージ師の資格もとって、スヌーズレンにも力が入る。

クロンボーフスのスタッフは、１ユニット＝６人

×３ユニット＋施設長、副施設長＋１＝21 人。

勤務時間は、6:30 ～ 14:30 ＝２人体制／ 14:15 ～ 22:00 ＝２人でみんなと食事をつくり（近くの肉屋さんなどのケータリングが多い）／夜勤＝１人。

日中は、旧ホイヴァンゲンや別の作業所、デイケアセンター、特別学校などでみんな活動している。

「ここに勤めてよかったことはなんですか？」と聞くと、「一つは、専門教育を充分活用することができることが嬉しい。そして、そのボーナスとして入居しているみんなから、生きる喜び、生きる力をもらっている。それが一番いいことかな」。

「この30年でデンマークの福祉は大きく変わったが、その原動力はなんだったとおもいますか？」には、「1980 年代から大規模な施設ではなく、小規模な「家」にと、叫び続けた人たちが、社会サービス法へと制度をつくっていった。”やってやれないことはない”と」

「副施設長としての夏休みはどうしてるの？」

「スタッフの休暇をめぐってはジグソーパズルのようになるので、今年の１月１日から必死で調整しています」「私は７月中に３週間。夫、子ども、イヌと小さなサマーハウスで過ごします」

（薗部英夫）

■グループホームにマッサージ室、スヌーズレン室、サウナ、花壇、洗濯室が完備。スタッフは彼らの興味のあるものをよく知っているので、それに合わせて声掛けする。ホスピタル・クラウンの研修を受けて笑いを引き出すそうだ。

年金は税金を払っても７万円はお小遣いとして自由に使える。

スタッフは順番で３週間の夏休暇をとる

日本でも「やってやれないことはない」を胸に刻んでこれからも活動していきたい。　（矢代美知子）